

【厚生労働大臣賞：中学生の部】

「素敵な出会いは勇気から」

山口県・下松市立末武中学校
2年 日高 幸乃 さん

私の母は看護師で、母の働く病院には重度の心身障がいがある方が入院しておられます。

昨年私は、母の勤める病院であった夏祭りに行きました。そこにはたくさんの障がい者の方がおられました。そこへ母が、20歳くらいの女性の車いすを押して私の方へ歩いてきました。その女性は首が変な方向に曲がり、手足は力が入りっぱなしで、震えていました。どうしていいのか戸惑っている私に母は、「とても優しい子だから、話しかけてごらん。」と言いました。勇気を出して私は「こんにちは」と言ったのですが、彼女からは全くといっていいほど反応がありません。私の目をじっと見ているだけです。困った私は、その場から逃げ出していました。

それから何日か過ぎたある日、私は母から一通の手紙を渡されました。その手紙は、あの日の女性からのものでした。封筒を開け中を見ると、そこには「話しかけてくれてありがとう。」と大きな字で書いてあり、その字からは彼女の一生懸命さが伝わってきました。母によると彼女は、「あの時友達になりたかったけど、自分は上手に話せないから気持ち悪がられると思った。」と言っていたそうです。

それを聞いたとき、私の中で何かが大きく変わりました。障がいがあっても考えていることや、心の中で感じていることは私と全く同じなんだと、初めて気づいたからです。

過去の私は、障がいがある人を「怖い」と思い込み、遠巻きに見ているだけで、積極的に関わろうとしませんでした。そして、そんな態度が知らないうちに相手を傷つけることがあったのかもしれませんが。このことに気づいた私は、母に頼んで「友達になってくれませんか。」と書いた手紙と、心を込めて作ったミサंगाを彼女に渡してもらいました。

それをきっかけとして、彼女との手紙のやりとりが始まりました。友達がいないうちの私の悩みに「私なんて友達がいたことすらなかった。だからあなたが私の大切な友達なの。それに、きっとあなたには自分が思っているよりも友達はいると思うから、もっと自分を信じていいんだよ。」とアドバイスしてくれました。

私はその言葉のおかげで、積極的に話しかけ、友達の輪を広げることが出来ました。何かあったときはいつも彼女に手紙を書きます。すると彼女は必ず温かい助言をしてくれました。彼女は私にとって最も頼れる存在です。私は彼女のように前向きで生き生きとした、素敵な女性になりたいと思っています。

彼女との交流を通して、私はとても大切なことを学びました。それは偏見をもつことの愚かさです。過去の自分を振り返ってみると、見た目だけで、自分とは違うと勝手に思い込み、障がいがある方を避けていました。そして、周りの目を気にして、関わろうとはしませんでした。その偏見が大切な存在との出会いを奪っていたのです。いろいろな立場の人と関わると、今まで知らなかったことが見えてきて、視野が広がります。たくさんの「初めて」を知るのは、とても楽しいことです。

私に大切なことをたくさん教えてくれた彼女が私は大好きです。みんな少し勇気を出して障がいのある人に話しかけてみたらいいのにと 생각합니다。私のように、とても素敵な出会いを見つけることが出来るからです。

彼女は今、病気が進行して一番の楽しみだった食事も取れなくなりました。そして、お腹に開けた穴から栄養を取っています。そんな状態では、外出することも許されないし、家族しか面会できません。だから、私が今彼女に会うことは、いくら望んでも叶わないのです。そんな私に出来ることはたった一つ、手紙で励ますことだけです。これからも彼女は私に大切なことを教えてくれるでしょう。そして、たくさんの勇気をくれるでしょう。私も彼女にその 100 倍のエールを送り続けたいと思います。「ありがとう」の言葉とともに。